

松平定信の伊勢物語筆写活動とその周辺

一戸 渉

*キーワード

伊勢物語・松平定信・好古・考証学・和学

はじめに

幕府老中首座として寛政の改革を主導し、將軍家齊の補佐役を務めた、白河藩第三代藩主松平定信（一七五八～一八二九）は、文政六年（一八一三）頃に執筆した『修行録』のなかで、以下のように述べている。

源氏ものがたり計も七部かき、廿一代集二部、八代集一部、万葉集は両度、三代集のたぐひ、さころも、いせものがたりなどいくつかさけん、忘れにけり。六家集も五度ばかんもかきにけん¹。

定信の古典愛好の深甚さを語るものとしてしばしば参照される文章だが、これまでに果たして何度まで書写に及んだのか忘れてしまうほど慣れ親しんだ古典のひとつに伊勢物語が挙げられているのは、注意されてよい。事実、定信が筆写した伊勢物語とその注釈書は一定数が現存している。

晩年の定信は寸暇を見つけては古典の書写に励んでいたようだ。文政元年（一八一八）十月十二日、当初の予定よりも早く『源氏物語』の筆

写（生涯六度目にあたる）を終えた定信は、「又何をかゝんと、この比よりかうがへぬるも、げに写病とかいふやまひ也けり」と自嘲気味につぶやいている（『花月日記』²）。この「写病」（「うつしやまい」と訓読みすべさか）なる語は、管見の限り同時代の他の文献に一切見えず、定信の造語かと思われる。

本稿では定信晩年における、こうした「写病」の症候のひとつである伊勢物語の筆写活動について俯瞰的な検討をおこない、それら一連の営みを近世期の学芸史上に定位してみたい。

一 写された伊勢物語たち

近時、国文学研究資料館に寄贈された、鉄心斎文庫の伊勢物語コレクションには、松平定信が文政六年（一八一三）に筆写した伊勢物語の写本一帖（以下、鉄心斎本）が含まれている³。これも先述した定信の「写病」により産み出されたもののひとつにほかなるまい。まずは書誌を示す。

列帖装。一帖。牡丹文緞子後補表紙。寸法七・三×六・三糎。表紙中央に打曇紙に金泥にて雲形を描く墨付のない題簽貼付け。見返しに金銀泥にて蝶・雲・草花を描く。内表紙に後筆で「楽翁細字／伊勢物語」と墨書あり。内題なし。字高五・九糎。每半丁十行。料紙は厚手の楮紙。印記「芦沢藏書」。「此本者高二位本朱雀院のぬりこめにをさまれりとそ／伊勢物語可祕々々／（業平略伝・略）／這伊勢物語者京極黃門定家卿息女民部卿局之真翰無疑者也／寛文四（甲辰）初冬／冷泉／左中将為清」との塗籠本系統の本奥書に続いて、「この書誤字もおほくかなつかひのたかひたるいと多しみな本書にしたかひてうつせしなり／文政六年三月十五日／六十六歳楽翁識」との松平定信の書写奥書あり。

手のひらに収まる程度の極小の枳形本で、書型の小ささに合わせて本文も細字で書かれている。鉄心斎本の第一の特徴は豆本、あるいは特小本、雛本などともいうこの書型の小ささであることは一見してあきらかだろう。第二の特徴としては、右の奥書からも了解されるように、本文系統が塗籠本と呼ばれるやや特殊な系統に属している点が挙げられる。第一の特徴である形態上の問題に関しては別稿を用意しており、第二の特徴については後述することにして、以下しばらく定信が筆写していた伊勢物語の関係資料について整理してゆこう。

戦前における定信研究の到達点といえる渋沢栄一『楽翁公伝』に、松平子爵家作製という「御書写物の大概」と題した資料の紹介があり、そこには享和三年（一八〇三）から文政十年（一八二七）にかけて定信が

筆写した書目九十点が並んでいる。当該書目は書名、筆写時期、員数を記すのみでいささか情報に乏しいが、それでも定信が少なくとも伊勢物語を四度（うち一回は屋代弘賢編『参考伊勢物語』）まで筆写していた事実が確認できる。ただ、渋沢も言い添えているように、当該書目に掲載されている九十点だけがこの期間に定信が筆写した書物のすべてではない。現に文政六年三月に筆写されたこの鉄心斎本は掲載されておらず、それ以外にも未掲載のものがいくつかある。

以下、論者の調査に基づいて、定信が書写した伊勢物語関係書を年代順に整理して掲げる。

○文化四年（一八〇七）頃写本（諏訪市博物館蔵）

卷子装。一軸。外題「伊勢物語」（松平定信）筆。花文立涌緞子表紙（二六・八×二七・一糎）。見返は布目地に金銀切箔散し。字高二・二。全長二六・二四・六糎。厚手の楮紙。印記なし。箱書「定信公御筆／伊勢物語」。箱に墨書「廿五番巻」ある紙標貼付。奥書は次節参照。高島藩主諏訪家旧蔵。

○文化六年四月写三冊本（「御書写物の大概」所掲・現存未詳）

○文化十三年四月写本（「御書写物の大概」所掲・桑名市博物館蔵）袋綴装。一冊。外題「伊勢物語」（松平定信）筆。裂表紙（一一・三×一七・一糎）。楮紙。印記なし。整理資料名「細写物語歌書」の内。奥書は第四節参照。岡村清兵衛寄贈。『花月日記』文化十三年四月二十五日条に「廿三日より、いせものがたり、うつし物しが、其日は、朝は萩の

侍従、ひる過るころより、つな子来り給ひて、まぎれしが、きのふ事少
なかりければおほく書写せしや、けふのひるの比におへぬ。そのことを
も末にかい置たり。いちはやきをおふやうにみえんもおかし。」とあり。
本文は天福本系統。

○文政四年（一八二二）九月写 屋代弘賢編『参考伊勢物語』（御書
写物の大概）所掲・天理大学附属天理図書館蔵）

列帖装。一帖。梅に笹葉文裂表紙。一三・七×一二・二釐。外題「参考
伊勢物語」（中央打付書・「松平定信」筆）。奥書「此参考は屋代ひろかた
のせしなり御本といふは高二位の本にして朱雀院の塗籠に納まりて有し
をかの御むすめ民部卿局のうつされし也これを御本としし為家卿の筆
のを家本とし時頼朝臣処持の時本とし為相卿のを相本とし真名本を名
本とし拾穂抄の本をもとにしてしるしたるなり／文政四年辛巳九月廿七
日写畢／六十四歳楽翁。「御自写／参考伊勢物語／文政五年正月十四日
下／御持由二番入」と墨書ある包紙付帯。現蔵印のみ。○八一・一五三
二二一。『花月日記』文政四年九月二十七日条に「この比うつせし参考
の伊せ物語をうつしおへぬ」とあり。白河市歴史民俗資料館『襲封二百
年記念松平定信公展』（一九八三）に図版掲載。

○文政六年写 塗籠本豆本一帖（鉄心斎文庫伊勢物語コレクション）
書誌は前述の通り。ただし『花月日記』文政六年三月十五日条には伊勢
物語筆写に関する記事なし。浴恩園にて綱子（蜂須賀治昭女で息定永正
室）と共に散り残る桜を愛で、昨日に「雲州の大崎のやしき」（松江藩松
平家江戸下屋敷）が花盛りであるから花見に来るよう誘われて断りを入

れたところ、紙に花を押し和歌を添えて贈られてきたのに対する返歌
が記されているのみ。

○書写時期未詳 一冊本（「御書写物の大概」所掲・現存未詳）
○書写時期未詳 伊勢物語歌留多（桑名市立博物館蔵）

全四一八枚。箱書「伊勢もの語／御哥かるた」（外箱）「定信様御筆／歌
かるた」（内箱）。料紙は金銀切箔散、金箔で縁及び裏面を覆う。絵なし。
署名・識語の類なし。岡村清兵衛寄贈。『王朝文化の美 伊勢物語の世界』
（齋宮歴史博物館、一九九〇）に図版掲載。

このように「御書写物の大概」に掲載されていない文化四年頃写の諷
訪市博物館蔵本および文政六年写の鉄心斎文庫本の存在から、定信は伊
勢物語を少なくとも六度書写し、さらに末尾に掲げたカルタまでも作製
していた事実が確認される。とはいえ、恐らくこれでもまだすべてでは
なからう。たとえば『花月日記』文化十三年四月二十五日条に、

廿三日より、いせものがたり、うつし物しが、其日は、朝は萩の侍
従、ひる過るころより、つな子来り給ひて、まぎれしが、きのふ事
少なかりければおほく書写せしや、けふのひるの比におへぬ。

とあり、すなわち先の文化十三年写本は二日半（二十三日は多忙であつ
たようなので実質一日半ほどか）で製作されたことになる。先に引いた
『修行録』での「いくつかさきけん、忘れにけり」という物言いに照らし
ても、これほどの速筆ならば今後新たな定信写本が出現する可能性は充
分に考えられる。

二 諏訪市博物館蔵定信写本について

さて、先に掲げた定信写本のうち、冒頭の諏訪市博物館蔵本は管見のかぎり、これまでの伊勢物語ならびに定信研究において詳しい紹介がなされていない資料かと思われる。該書には以下に示すような複数の奥書があり、近世期の伊勢物語写本の流布状況を知る上でも一定の意義を有すると思われるので、ここで若干の考察を試みたい。

以下が該書の奥書である。論述の都合上、それぞれの奥書にアルファベットを冠し、既知の定家本の奥書などは適宜中略した。

〔業平朝臣〕「親王」「行平卿」「紀有常」「二條后」「河原左大臣融」略伝・「なそへなく」「六帖哥」「宗玉神女賦」「曹子建洛神賦」「みやひ」註釈あり)

A 天福二年正月廿日己未申刻凌桑門之盲目連日風雪之中遂此書写為授鐘愛之孫女也

同廿二日校了

B 此目下〇無之

右書本者為定家卿自筆 禁裏御本也隨有縁申出為處証本不違一字一点令透写遂再校訖雖然魯魚誤猶難遁者歟

准三宮(花押双鉤)

C 勢州人可加奥書之由告予披而閱之乃伊勢物語也聖護院門主道興被贍写焉清濁声等尤分明可謂証本也筆花孰若梅之花盛文潤孰若

伊勢尾張海面如予明記之吁向行水尚數書者歟

元和元光仲春望 重槐藤ノ判

D 春とはいへといいたうさむさも身にしみ雪さへちりかふに火辺にのみものしたれさすかに春の日なりければ山鳥の尾上にしつむ光まてはいとなか／＼しかりけりこのふみかくて草に書写したるか二日になんおへにける事少なかりける楽翁のまた後にもおもひやりなんかしきさらきの末つかたになんありける

末のからす丸光広卿の清濁分明とするされしか清濁はいさか朱にてしるしたるかしかも人のよむにもかはらすされとそ
の処／＼こゝにかきぬき出すもの也

・かいまみ たのむのかり よろこほいて 君のみけし うけへは 年へぬるかとおやあはてにけるけり 時鳥ななくむくつけき ちりかひくもれ 道まかふかに 是のみにてなんありける

E 本云

以京極黄門定家卿自筆兩本ノ校合訖

F 以黄門筆不違一字書写之本亦同模之者也

G 抑伊勢物語根源古人説々不同或在原中將自記云々(中略)ノ先年所書之本為人被借失仍為備証本書而所校合也ノ戸部尚書在判

H 近代以狩使事為(中略)言葉而已ノ戸部尚書

I 右兩本之奥書追書加之畢

J 右本は牡丹花より伊予宗珀江御ゆつりそうはくより霜田宗柳へ御ゆつりそうりうより大黒常信に御ゆつりのしのふすりの本をもて一字たかはす手つからうつしみつから校合をとけひとつ子にさへありければ息女にこれをあたふる物ならし

寛永第五月日 常信（花押）

K 頗様違たる文にてこれをもて今校合し圈点をくはへてわかつ／以下、それぞれについて若干の解説を加えてゆく。

文化丁卯春 楽翁

Aは天福本系統の定家奥書。続く奥書Bは花押及び署名から近衛房嗣の子で、聖護院門跡などを務めた道興（一四三〇～一五〇一）のもののように見えるが、実は法橋玄津筆本系統に見られる長祿二年（一四五八）の玄津奥書と、署名を除いてまったくの同文である。おそらく何者かが年記を削り、署名を道興のものごとく改竄したのであろう。さらに伊勢人の依頼で道興筆であることを記した元和元年の加証奥書Cも、一見すると烏丸光広のものようだが（実際次の奥書Dを書いた定信もCをそう認識している）、光広が「垂槐」すなわち権大納言に任じられたのは翌元和二年二月十三日のことであって、『公卿補任』はなはだ不審である。年記を欠くが二月末の某日に二日間書き終えた際の感慨が記されている奥書Dは、文中に「楽翁」とあることから定信の書写奥書と見てよい。

さて、無署名の奥書E・Fはともに定家筆本と称するものに基づいて、校合、書写を行った旨を記す。続く奥書Gは根源本第二系統、奥書Hは

武田本と定家本系統の奥書である。IはこのG・Hの奥書を書き添えた際に付されたものである。Jは牡丹花肖柏から伊予宗珀、下田屋宗柳と肖柏門下に伝えられてきた本を、江戸銀座を取り仕切っていた大黒家の三代目で能書としても知られる長左衛門常信が伝承し、それに基づいて常信が寛永五年（一六二八）に書写及び校合した旨を記す。奥書Kは文化四年春に定信が校合を終えた際に付したものである。

奥書Eに冠されている符号「〇」は、奥書Bの注記「此已下〇無之」に対応したもので、奥書A末尾の一字「了」の傍記「〇之」や、伊勢物語本文にも「〇」を付した異文注記が見られること、またこれ以後に複数の定家本系統の奥書が続いていることから見て、いずれも文化四年春に定信が校合を行った際に付したものと判断される。すなわち諏訪市博物館蔵本とは、まず定信が奥書A・B・Cを有する天福本系統の一本を文化四年以前の二月末に書写し、その後、文化四年春に奥書A・E・F・G・H・I・Jを有する定家本系統末流の一本に基づいて校合を行い、先の本にはない奥書をも書き添えたものといえることができる。

ここで念のため奥書D・Kに見える「楽翁」号について述べておこう。『花月日記』が起筆された文化九年四月六日条に、

六日 願ひゆりてけり。つくどくと思に、わがごときものといへども、かくめでたき御代なればこそ、楽み侍ることも出くれ。

やすけなき世ならばいかで世を捨て此たのしみの身とはならぬ
かくてぞ、楽翁とはいひける。

とあることから、致仕後に定信が初めて「楽翁」号の使用を開始したと

する理解がまま見られる。しかしはやく渋沢栄一『楽翁公伝』に、

致仕の後始めてかく称せられたるが如くなれど、これたゞその別号の由来を述べられたるものにして、事實は必ずしも然らず。公は四十五歳の頃、早く既に楽翁の号を用ひられたりしなり。即ち「心双紙」の序に、自ら「享和二年三月楽翁しるす」と認められたることによりて明らかなり。されど専らこの号を用ひられたるは致仕以後の事なりとす。(四〇八頁)

とある通り、「楽翁」号は文化九年四月の致仕以前から用いられている。同書ではその根拠として享和二年(一八〇二)の『心の双紙』序末署名を挙げているが、この他にも管見によれば国立国会図書館蔵『かつみ考』(八二七・九三・定信自筆)奥書「文化四年ふつき廿日あまり四日楽翁識」、桑名市立中央図書館蔵『初度百番自歌合』(秋山文庫八五八)奥書「文化七のとしむ月廿日余り八日楽翁しるす」、桑名市博物館蔵『まくらの双紙』奥書「文化八年五月十六 源楽翁」、同館蔵『新撰六帖和歌集』奥書「文化九年正月廿七日写畢 楽翁」といった例を確認している。以上、些細な問題のようだが、ことが資料の信頼性や成立時期の判定に関わる点であるので念のため確認しておく。

三 塗籠本の江戸

さて、先述した通り鉄心斎文庫本伊勢物語の本文は塗籠本と呼ばれる系統に属するものであった。塗籠本は当時ひろく流布していた定家本と

は随処に異同が認められ、章段の数も少ないことから、古態を留めるものと見做されてきた伝本系統で、現存諸本はいずれも伝民部卿局筆本とも呼称される鎌倉写本(本間美術館現蔵)を祖本として近世中期以降に転写されていたものに限られている。従来、この塗籠本は屋代弘賢『参考伊勢物語』(文化十四年刊)が校本に用いたことで初めて斯界の知るところとなったとされてきたが、安永九年(一七八〇)に五十五歳で没した賀茂真淵門の和学者山岡俊明がいはやく披見・書写していた形跡があることを指摘しておく¹¹⁾。いずれにせよ塗籠本は近世中期以降、江戸の和学者たちの間でにわかに脚光を浴びることとなった伊勢物語の異本であった。

『参考伊勢物語』文化十年の弘賢序「これは高二位の本朱雀院の塗籠に納まりて有しを伝へて、かの卿のむすめ民部卿局の写されしか森山孝盛ひめをけるにて」云々、また塗籠本を底本とする『群書類従』の伊勢物語奥書に「右朱雀院塗籠御本伊勢物語一巻以森山孝盛所蔵民部卿局真跡本」とあり、この頃、伝民部卿局筆本を所持していたのは幕臣の森山孝盛(一七三八〜一八一五)であった¹²⁾。森山孝盛は定信とも職務上も、また和歌など文雅の上でも種々の接点があるため、定信が該書を直接披見した可能性も充分にあるが、鉄心斎文庫本と伝民部卿局筆本とを対照してみると、仮名字母も随処で異なり、また漢字を仮名に開くなどの処理が行われた部分もあり、また定信が鉄心斎文庫本を書写した文政六年の八年前にあたる文化十二年に孝盛は泉下に帰していることなどに鑑みて、鉄心斎文庫本は原本を傍らに置いた臨写とは考えにくい。なお、定

信旧蔵の塗籠本伊勢物語としては「楽亭文庫」「桑名」の印記を有する東海大学附属図書館桃園文庫蔵本の存在が知られている¹³⁾。こちらの本文は伝民部卿局筆本にかなり近く、臨写かそれに近い状況下で書写されたと推察されるものの、書写奥書はなく、現時点では筆者未詳の近世後期写本とするほかない。

先述した通り、この塗籠本は近世中期に江戸の和学者たちによって見出された資料であり、屋代弘賢『参考伊勢物語』を皮切りに、注目すべき伊勢物語の異本として盛んに参照されるようになる。このことについてはすでに先行研究でも指摘があるが、若干の遺漏を補っておきたい¹⁴⁾。

まず享和二年（一八〇二）頃に成った齋藤彦磨（一七六八～一八五四）の『勢語図説抄』の初段の注釈中に「ぬりこめ本といへるに女ばら住けり」とあるは「云々とあるのは、ごく限定的なものであるが塗籠本を解釈に用いた最早期の例として注意される。また、国文学研究資料館鉄心斎文庫伊勢物語コレクション中の安永五年（一七七六）刊『伊勢物語傍注』の後印本は、著者である賀茂季鷹（一七五四～一八四一）自身が旧著に自筆で補訂を加えた上で賀茂別雷社三手文庫に奉納したものと考えられるが、本文の随処に塗籠本に基づく訂正が施してある。文政元年（一八一八）刊の藤井高尚『伊勢物語新釈』凡例の「又一とせ江戸にありつる頃朱雀院のぬりこめ本と聞えしを民部卿ノ局のうつしかゝれたるをすきうつしといふものにして屋代弘賢のものたるを見しに、いかにぞやおぼゆるふしもまじれゝど、ことにすぐれてよき事どもあり」云々ともあって、先にも触れた『群書類従』（文政二年刊）所収「伊勢物語」の存在も含め、

塗籠本はとりわけ十九世紀以降、伊勢物語研究の上で重要な位置を占めるようになる。弘化二年（一八四五）頃に成った齋藤彦磨『伊勢物語新釈弁』で、

塗^{マダ}込本は世にしられたる山師学者とかいへる人の手より出て、虚実邪正の弁へもなく、よの常にたがひたる説をはめづらしがり、よろこびうべなふくせある愚直の老大人、うへなき室ともてはやさるゝを、よきことゝ思ひてみだりに本文を改めしなるべし。あまりにをさなくてわらしもせられ、かたはらいたくもおもはるゝなり¹⁵⁾。

と、塗籠本が偽書であるかのごとく語られているのも、当時の該書に対する注目度の高さのあらわれといえる。

このように塗籠本がこの時期に注目を集めた理由は、世には京極中納言のかゝせ給へる本をのみつたへて、猶うたかふへきことをほかるを今屋代弘賢ぬし、こと本をあまたかうかへあはせて参考と名つけらる。ふむやのかみ衡の朝臣はからふみをもとゝしてみくにのふることをさへにこのみ給へは、此参考を梓にちりはめんことをすゝめ給ふ。

との『参考伊勢物語』の塙保己一による序文が端的に述べているように、非定家本系の異本と見なされていた点にあったと見て相違あるまい。本書の刊行は林述斎（諱衡）といった儒学者の懇慫もあったのだという。流布本とは異なるテキストを有する異本、また虫損跡までも忠実に再現した古典籍・古筆の模刻や好古図譜、また和漢の佚存書を収録した叢書など、従来貴顕の文庫や寺社の蔵等に秘め置かれていたために広く知ら

れていなかった諸資料が、とりわけ寛政期以降、文化・文政年間にかけて陸續と公刊されている事実にここで目を向けてみたい。

その種の出版物のうち、主なものを一覧化すると以下のようなだろう。

○「寛政十年」（一七九八）刊 斎田茂利編『尚古法帖』 ※藤原行成筆後嵯峨院本白氏詩卷模刻

○寛政十一年六月刊 真福寺旧藏承德三年（二〇九九）写『将門記』模刻（植松有信編）

○寛政十一年七月跋刊、『古今集 秋下部』（橘千蔭・小沢蘆庵・伴蒿蹊跋） ※高野切秋下一巻模刻

○寛政十一年十月〜文化七年（一八一〇）序刊 林述齋編『佚存叢書』※木活字版。漢籍佚存書の翻印。

○寛政十一年十一月刊 『日本後紀』（塙保己一編）

○寛政十二年十二月刊 勝福寺藏『文館詞林』卷六九五零葉模刻（橋本経亮編）

○寛政十二年正月序刊 松平定信編『集古十種』

○享和元年（一八〇一）刊 真福寺藏鎌倉期写『尾州大須宝生院藏倭名抄残篇』模刻（巻一・二零葉、稲葉通邦編）

○文化二年（一八〇五）刊 『万葉和歌集校異』（橋本経亮・山田以文校） ※元暦校本による寛永版の校注本。

○文化四年刊 真福寺藏弘長三年（一二六三）写『口遊』模刻（大館高門編）

○文化十四年刊 屋代弘賢編『参考伊勢物語』 ※塗籠本を校本に採

用。

○文化十三年序刊 市野迷庵編『正平本論語』（狩谷核斎序）※『正平本論語札記』を附す。

○文政二年（一八一九）刊 塙保己一編『群書類従』

○文政十年成・明治十六年刊 狩谷核斎編『箋注倭名類聚抄』

○文政十一年刊 野里梅園撰『梅園奇賞』正統 ※古筆・古画・古文書・金石・古器物などの模刻。

またこの時期には幕府及びその周辺において大規模な書物の編纂事業が相次いで行われている。『御実記』『朝野旧聞稟藁』といった歴史書から、『寛政重修諸家譜』などの家伝、『新編武蔵風土記稿』『新編相模国風土記稿』といった地誌に至るまで、根拠となる史料を列記するという考証学的態度に貫かれたこれらの著作群が産み出された当該時期を、高橋章則は「編纂書の時代」と呼ぶが、こうした史料主義的態度は当然ながら右に掲げたような出版物にも同様に指摘できる。

十八世紀後半より始まる好古や考証学の流行は、当代和漢知識人の多くに史料探索の熱情を駆り立て、各地の古社や名家の所蔵する文書・典籍・旧物等の調査が行われるに至る。その結果として近代的な歴史学や文学研究の基礎となるような業績がこの時期に陸續と発表されることになるわけだが、『集古十種』の編者である松平定信はまさにこうした潮流のただ中にいた人物であった。¹⁷⁾

そして定信の伊勢物語筆写活動もまた、こうした思潮の影響を確かに受けたものと見なすことができるだろう。先述した文化四年（一八〇七）

頃、そして文化十三年に定信が筆写する際に底本として選択した伊勢物語は、当然ながら当時最も流布していた天福本であった。しかし、文化十四年刊『参考伊勢物語』及び文政二年刊『群書類従』により塗籠本の本格的な紹介がなされたことを受けて、定信は文政四年に『参考伊勢物語』を書写し、その二年後に製作した鉄心齋文庫本では塗籠本を底本として伊勢物語の筆写を行うに至ったわけである。先に触れた定信旧蔵の桃園文庫本伊勢物語が製作されたのも、おそらくこの文化末々文政中期頃かと思われる。定信が伊勢物語の依拠本文を、文政六年に至って天福本から塗籠本に切り替えたのは、当代の江戸の知識人社会における異本や異文、新出資料への関心の高まりが背景にあつたものと考えてよからう。⁽¹⁸⁾

四 定信と考証学

最後に、松平定信の伊勢物語に対する考証学的な関心、及び定信と当代考証学者との従来注意されていない接点について粗描しておく。

定信の蔵書目録である『浴恩園文庫書籍目録』及び『白河文庫全書分類目録』には「参考伊勢物語」「伊勢物語集注」「伊勢物語首聞抄」「伊勢物語之和歌」「伊勢物語」「伊勢物語高⁽¹⁹⁾位本」「伊勢物語二冊也足叟校定」「伊勢物語古意六冊賀茂真淵撰」といった伊勢物語関係書の名が見える。このうち、「伊勢物語高⁽¹⁹⁾位本」は先述した桃園文庫本のことであろう。上述してきたような筆写活動に加えて、注釈書も含めた関連資料の収集

を行っていたことが解る。ただし、実父宗武が『伊勢物語註』という注釈書を著している一方、定信には伊勢物語に関するまとまった著述は確認できない。

ところで、桑名市立中央図書館蔵『御歌集』は、従来の定信研究では触れられていない資料のようだが、享和三年三月から六月、文化元年元日から文化二年までの歌文がおおむね時系列順に収録されており、『花月日記』（文化九年起筆）及び『今波恋』（文化三々五年の源氏物語書写に関する和文日記）⁽²⁰⁾執筆以前の定信の諸動向を知る上でも注目すべきものである。⁽²¹⁾同書の享和三年五月十日条における以下の記事には、定信の伊勢物語注釈への関心の片鱗を窺うことができる。

みちのくのしのふの里江いひやりて紫根をもてうちかへに乱れかわしくきぬをすりこせといひやりたればけふきたる。古のさまをもみるへし。もとより草すり紫の根すり一やうにはあらざるへし。いせ物語のしのふすりきたるは紫の根すりなればこそわか紫とはいひたれ。春日のとはたゝいひこおせしことなり。されはしのふのみたれとはよみつゝけたれ。しのふの紫もてするなといふは無下なり。⁽²²⁾

みちのくのしのふの里の賤のおかもちりするなる衣は此衣

伊勢物語初段に登場する「しのぶすり」については古来より諸説あるが、定信は奥州信夫郡産のムラサキの根で摺付け染めにした衣のことと解していたようで、そのレプリカの製作まで実施していたらしい。享和二年頃に成った齋藤彦磨『勢語図抄』のような、伊勢物語に登場する衣服、調度、動植物等のさまざまなものについて図示しつつ考証した著作が同

時代にあり、定信によるこのレプリカ製作も、前節でも述べたようなそ
うした尚古的考証学の流行という潮流のなかに位置づけられよう。『集古
十種』の編者たる定信にとつて、当然ながら伊勢物語もまた「古のさま」
を窺うための好資料のひとつであった。

事実、この時期の定信の周囲には屋代弘賢や埜保己一、清水浜臣、林
述斎などの考証学的傾向をもった和漢の知識人が多数存在していた。し
かし、従来の研究では狩谷掖斎と定信との接点については指摘がないよ
うである。『花月日記』文政十年閏六月十日条には自身の所蔵する古書・
古物を持参して定信のもとを尋ねる「つかるや三右衛門の隠居」こと掖
斎の姿が次のように描かれている。

つかるや三右衛門の隠居ふるきもの得しとてみする、多度寺の資財
帳、桓武の比のもの也、白氏のいまたうせさる前の只文集とせし零
本二尤奇也その余王莽の威斗とかいふはかりなど也、多度寺といふも
の伊せにはなし、多度山はあれとも唯一也、資財帳板にするとてそ
れに文字かく事をこふ、そのためにみせに來りし也。⁽²⁴⁾

この日、掖斎が持参した品々について注解を加えておく。「多度寺の資
財帳」とは『伊勢国多度神宮寺伽藍縁起并資財帳』のこと。「白氏のいま
たうせさる前の只文集とせし零本二」とは金沢文庫本『白氏文集』巻二
八・三三のこと。「余王莽の威斗とかいふはかり」は『漢書』王莽伝に登
場する新朝の皇帝王莽が製作したという柄杓のことである。ちなみに墓
碣銘によれば掖斎はこの王莽の威斗のほか、漢鏡・漢錢・中平の双魚洗・
三耳壺という漢代の遺物五点を蔵し、それに漢学を好む自身をも加えて

「六漢老人」と称していたというから、よほど自慢の品であったのだろう。⁽²⁵⁾

「資財帳板にするとしてそれに文字かく事をこふ」とあるので、『伊勢国
多度神宮寺伽藍縁起并資財帳』の摸刻作製にあたり、掖斎は定信に序文
か題箋の版下揮毫を依頼しに來たのであろうか。当該摸刻本については
東京大学総合図書館南葵文庫本及び東大史料編纂所蔵本を閲したが、
共に序跋や刊記の類はなく、前者は早印本だが原題簽欠。後者は巻頭に
「多度社印」の蔵版印があり、紙の風合などから近代の後印本である。
ただし、同書の題箋の揮毫は池田冠山が行ったようであるから、定信は
何らかの理由で辞退したのかも知れない。

なお、掖斎「影彫多度寺資財帳後記」には「多度寺縁起並資財帳共一
巻、余、從京師竹苞樓購獲之。竹苞樓之思順軒文著翁。翁獲之於東寺敗
麓中」とあり、掖斎は当該資財帳を京都の書肆佐々木竹苞樓から購入し
たようで、もとは思順軒文著なる人物が東寺の「敗麓中」から得たもの
のようである。

蛇足ながら、この思順軒文著がいかなる人物であったのかについても
從來注意されていないようなのでここで注解を加えておこう。『永平寺史
料全書』禪籍編第一巻（大本山永平寺、平成十四年）掲載の伝道元禪師
一行書「万事智団円」の附属文書に「万事智団円諸名家拜觀姓名覚書」
なるものがあり、その中に「同（京師・論者注）紫野沙門 文著 思順
軒」との一条がある。同書の注には「思順軒 文著と号し、また聴雨斎
と号した。『紫野沙門』とあるのは、大徳寺（京都市北区紫野）に所属す
る僧であることを示していると考えられる」（八三二頁）とある。「聴雨

齋」との号が何に拠ったものかは不明だが、この人物は文化四年刊の『墨蹟時價録』という書画の価格を記した一枚刷り（神宮文庫蔵）を作製した思順軒文著と同人であろう。

天明の大火以後、東寺の所蔵する古文書や典籍については、藤貞幹や橋本経亮といった京都の和学者たちによって継続的な調査が行われており、定信もその調査事業に関心を持ち、彼らに模写本の製作を依頼していた形跡があることについては以前論じたことがある²⁰⁾。東寺の調査活動によって発見された諸資料は、こうした和学者・考証学者たちを介して江戸の地に、そして定信のもとにもたらされていた。定信が塗籠本伊勢物語に着目し、その写本を製作した環境とはこのようなものだったのである。

おわりに

以上、本稿では松平定信の伊勢物語筆写活動の実態を追いつつ、その底本が天福本から塗籠本へと遷移してゆく過程を明らかにし、その変化の要因を十八世紀後半以降盛んとなる資史料の調査と収集という、広義の考証学の流行に求めてきた。同趣の事態は当然ながら本稿が取り上げた伊勢物語以外にも指摘できることかと思われるが、ここから定信は当代の和漢学芸史上の諸動向について極めて鋭敏な触覚を持っていたことは少なくとも指摘できるだろう。定信が近世後期の学問・文芸のキーパーソンのひとりであることは論を俟たない。にもかかわらず、い

まだ十分に明らかになっていない部分も大きい。本稿、そしてほぼ同時に刊行予定の別稿（『風雅と教誡―松平定信の細写本歌書製作―』・注4参照）はそうした未開拓領域解明のための一里塚にほかならない。

〔注〕

- (1) 松平定光校訂『宇下人言・修行録』（岩波書店、一九四二）一九五頁。
 - (2) 『花月日記』文化十一年分以降の引用は岡島偉久子等による『ピブリア』一一一号以降連載の翻字による。本稿執筆時には一四九号に文政九年十月分まで掲載。以下本稿での『花月日記』からの引用は、特に断りのない限り当該翻字による。
 - (3) 『鉄心齋文庫所蔵伊勢物語図録』第一集（鉄心齋文庫伊勢物語文華館、一九九一）掲載。
 - (4) 拙稿「風雅と教誡―松平定信の細写本歌書製作―」（『国文学研究資料館紀要 文学研究篇』第四五号、二〇一九年三月刊行予定）。
 - (5) 渋沢栄一『楽翁公伝』（岩波書店、一九三七）三八一頁以下。なお、書写年時不明のもの十九点を含む。
 - (6) 『大定信展―松平定信の軌跡―』（桑名市・白河市合同企画展実行委員会、二〇一五）等の展示図録等に掲載されたことはあるが、解説などでも本文の系統や奥書などについては触れられていない。
 - (7) 池田亀鑑『伊勢物語に就きての研究』研究篇（大岡山書店、一九三
- 四）一七六頁以降参照。

(8) 定信が校合に用いたと思しき奥書A・E・F・G・H・I・Jを有するこの定家本系統末流の一本について、同一の奥書を有するものに国文学研究資料館鉄心斎文庫蔵本(九八一九九)があることを言い添えておく。

(9) 木村三四五編『花月日記文化九年・十年』(私家版、一九八六)三頁。

(10) 例えば、前掲『大定信展―松平定信の軌跡―』展示番号一〇六解説に「楽翁」の署名があり、定信が隠居した文化九年以降の作品と考えられる」とあり、また藤田真一「治者の文雅―白河侯と花月老人」(『文学』第七卷第一号、二〇〇六)に『花月日記』の当該条を引き、「安らかな御代だからこそ、世を捨てて「たのしみの身」になれるのだと言ひ、このゆえをもって、以後みずからを「楽翁」と称すると宣言した。」とある。

(11) 国文学研究資料館初雁文庫蔵本(二二二三九八、寛政十二年玉樹新紹写)及び奈良女子大学蔵本

(<http://www.lib.nara-wu.ac.jp/nvugdb/k001/index.html> 参照)

〔近世中期〕藤直寿写、不忍文庫・阿波国文庫旧蔵)に無年記の山岡浚明本奥書あり。ただし伝民部卿局筆本を忠実に写したものではなく、浚明の書写はかなり草卒なものであったと推察される。

(12) 森山孝盛については森銃三「森山孝盛のことども」(『森銃三著作集』第十一卷、中央公論社、一九八九、所収)に詳しい。

(13) 大津有一「伊勢物語に就きての研究 研究補遺篇」(『伊勢物語に就

きての研究 補遺篇 索引篇 図録篇』有精堂、一九六〇、所収)及び福井貞助「朱雀院塗籠本伊勢物語の流布」(『伊勢物語と古典文学』風間書房刊、二〇〇〇、所収)参照。以下、書誌を略記する。袋綴装。一冊。渋引き横刷毛目模様表紙。縦二六・八×一九・八糎。大本。楮紙。〔近世後期〕写。筆写者未詳。表紙に右肩に「い」「式」の方印を捺す。外題「伊勢物語 全」(左肩打付)。内題なし。每半丁十行。字高一五・七糎。奥書「此本者高二位本朱雀院のぬりこめにをさまれりとそ伊勢物語可祕也(業平閱歴勸物略)ノ(以下、為清筆跡模写)這伊勢物語者京極黃門定家卿息女民部卿局之真翰無疑者也ノ寛文四(甲辰)初冬ノ冷泉ノ左中將為清」。卷末に「墨付六十三枚」の小字注記あり。印記「楽亭文庫」「桑名」「東海大学蔵書」。

(14) 前掲福井貞助「朱雀院塗籠本伊勢物語の流布」参照。

(15) 『鉄心斎文庫伊勢物語古注釈叢刊』十三(八木書店、二〇〇二)の影印参照。

(16) 高橋章則「近世後期の歴史学と林述斎」(『東北大学日本思想史研究』第二十号、一九八八)。

(17) 拙著『上田秋成の時代―上方和学研究―』(ベリかん社、二〇一二)第二部第四章「秋成と好古―天明・寛政期を中心に―」第三部第四章「橋本経亮の蒐集活動」及び、拙稿「偽証家」藤貞幹の成立」(『アナホリッシュ国文学』第三号、二〇一三)、「橋本経亮と真福寺文庫―尾勢展観目録并抜粹」考」(『斯道文庫論集』第四十八

輯、二〇一四）等参照。

- (18) 先掲福井貞助「朱雀院塗籠本伊勢物語の流布」は、保己一序で『佚存叢書』の編者林述斎（ふむやのかみ衡の朝臣）が刊行を慫慂したことに触れている点に注目しつつ、「このような文献学的志向が国典の保存校勘をもうがしたのである」とする。本稿は、福井によるこの指摘を敷衍し、それを定信をも含めたより広い近世後期の芸史の文脈から捉え直そうとしたものである。

- (19) 朝倉治彦監修・高倉一紀解説『松平定信蔵書目録』（ゆまに書房、二〇〇五）所収の影印参照。

- (20) 岡嶋偉久子「松平定信自筆『今波恋』（一）・（二）——源氏物語の書写日記——」（『ピリア』第一〇七・一〇八号、一九九七）。

- (21) 大本二冊。「近世後期」写。筆写者未詳。奥書「文化二年の詠なり反古堆よりとり出て書之／文政九年八月いさよひ 楽翁」。秋山文庫九九九。同書は昭和三十四年の伊勢湾台風による損傷を受けており、享和三年六月二十九日以降の丁を欠く。また現状は二冊であるが被災以前の冊数なども不明である。『花月日記』文政九年八月十六日条には「けふより文化二の記をかき畢りぬ」とある。

- (22) 本書には定信による推敲が部分的になされているが、引用に際しては推敲後の本文のみを掲げた。

- (23) 梅谷文夫『狩谷掖斎年譜』上下（青裳堂書店、二〇〇四、六）に言及なし。

- (24) 東京大学史料編纂所蔵近代写本（四一七三―一三三三）参照。

- (25) 『狩谷掖斎―学業とその人―』（早稲田大学會津八一記念博物館、二〇一七）参照。

- (26) 東京大学総合図書館蔵『桑名郡多度寺鎮三綱謹牒上神宮寺伽藍縁起并資財帳』南葵文庫旧蔵（C四〇―一六四六）、東京大学史料編纂所『神宮寺伽藍縁起并資財帳』（五三二―一四）。

- (27) 前掲梅谷文夫『狩谷掖斎年譜』下巻文政十年六月二十三日条参照。

- (28) 前掲梅谷文夫『狩谷掖斎年譜』下巻文政十年五月一日条所引のものに拠った。なお、西宮秀紀「多度神宮寺伽藍縁起并資財帳の伝来と写本研究覚書」（『専修大学人文科学研究月報』第二八七号、二〇一七）に掖斎所蔵本を含めた当該資財帳の近世から近代にかけての流布状況について詳細な整理がある。

- (29) 前掲拙稿「橋本経亮の蒐集活動」（『上田秋成の時代―上方和学研究―』所収）。